

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A・B中学校)

年度当初に「この学級で大切にしたいこと」及び「居心地のよい学級にするためにできること」を生徒と共に考え、学級会でまとめた。また、それを全校集会で発表するとともに、学期末に自己評価を行い、次の学期に向けて継続することや改善することについてまとめた。



学級の誇りを
全校集会で紹介

【取組2】(C中学校)

学級活動の中で、意図的に構成的グループエンカウンターの手法を取り入れた授業を実施し、円滑なコミュニケーションを図ることができるようにし、豊かな人間関係の醸成を図った。

【取組3】(D中学校)

体育祭の午後に「D中フェス」と称し、実行委員会を立ち上げるとともに、生徒自身で企画・運営・実施を行った。全員がただ競技に参加することを再考し、企画や運営という形で、D中フェスに関わり、生徒同士の関わりを増やすことができた。

【取組4】(A中学校)

学校の敷地にある銀杏並木を活用して、生徒自身で銀杏を洗浄・乾燥させ、封入し販売する。この活動で得た利益については、当該委員会で話し合い、学校の花壇の費用に充当したり、各種施設に寄付したりする等、生徒自身で使い方を検討している。



銀杏を乾燥させている様子

【取組5】(D中学校)

英語や国語等の教科において、音読や発表をする際に、従来は学級の前で発表する形をとっていたが、緊張等で本来のもっている力を発揮することができない生徒もいた。そこで、全体での発表を取りやめ、廊下等で発表したり、一人1台端末を活用して事前に収録したりする等、生徒の心理的不安を解消し、本来の、教科の資質・能力を評価できるようにした。

【取組6】(A中学校)

生活指導主任と連携し、生徒のSOSの出し方や受け止め方の指導を行った後、不登校対応巡回教員が上記調査を活用して、校内研修を行った。生徒の学校生活に対する認識や、教員の取組や悩み等を共有するためにどのようなことができるかについて話し合うとともに、また効果的な事例について資料を用いて共有することができた。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（A中学校）

開催する会に応じて、対象となっている生徒の状況を大局的に把握したり、ケース会議的に、一人の生徒にしぼって、当該生徒の状況や支援策、関係機関との連携等について検討したりしている。



校内委員会の様子

アウトリーチによる支援（A中学校）

登校しぶりがある生徒に対して、学級担任や学年主任、SC、SSWと連携し、家庭訪問を実施した。1回の家庭訪問で成果を出そうとせず、継続的に家庭訪問することで、生徒及び保護者との信頼関係を構築することができ、結果的に校内別室につながる事ができた。

校内別室における支援（A・B中学校）

校内別室における支援で重視していることは次の3点である。

- ①教室復帰のその先まで見通して支援すること
- ②校内別室支援員と連携すること
- ③校内別室の生徒同士を（できる範囲で）つなげること

教室復帰がゴールではなく、当該生徒が安心して学習したり、生活したりできる環境を一緒に模索していくことが重要である。校内別室で生徒の話を傾聴したり、生徒と一緒にSSTに取り組んだりして、生徒から信頼される人間関係を構築できるようにした。



デジタル機器を活用した支援（A中学校）

一人1台端末を活用し、教室での授業の様子を、校内別室や自宅から視聴できるようにするとともに、コメント欄で意見を書いたり、発言したりすることができるようにした。また、地区で導入しているドリルソフトを活用して、下学年の内容から復習することもできた。

関係機関との連携（市内全公立中学校）

SCやSSWはもとより、子ども家庭支援センターや教育支援センター等と積極的に連携を図っている。特に、巡回相談やケース会議等の場で、当該生徒や保護者と今後どのように対応していくか、様々なケースを基に、当該生徒にとってよりよい対応を検討することができた。

成果

- 教育支援センターとの連携
- 他校の事例を生かした新たな支援
- 校内別室運営の充実

課題

- 校内委員会等を通じた、不登校対応巡回教員の活用に関する好事例の発信
- 研修内容の還元